

第8回 6月12日の講義内容

■ §3-4. 尺度の再構成

- 絶対尺度: サーストン尺度
- 相対尺度: リッカート尺度
- 類積尺度: ガットマン尺度

6/12/02

1

サーストン尺度 Thurstone Scale

- 1930年代に提案
- 等現間隔尺度 equal-appearing-interval scale
- 質問(文)をランダムに回答者に提示し、賛成or反対を答えさせる。
- 各質問(文)には尺度値がついている(対応している。)
 - ポイント1: 尺度値を予め作成しておく。

6/12/02

2

サーストン尺度 (2)

- 尺度値の作成手順
 - 問題となる対象についての質問(文)を多数作成(好意~非好意)
 - ポイント2: 多義性のある質問は排除
 - 判定者(判断者)によって各質問を好意度を表すグループ(奇数)に分類
 - 各グループに得点を与える。一つの質問(文)について、判定者の得点分布を作り、その平均またはメディアン(中央値)をもって、その質問(文)の尺度とする。
 - 尺度が等間隔になるよう質問(文)を調整。

6/12/02

3

サー斯顿尺度(3)

- 問題点
 - 面倒
 - 判定者とその数をどうするか
 - 多義的な質問 メディアンや平均を見ただけでは判らない。
四分位レンジ、分散をみてチェック
 - 一応間隔尺度を構成

6/12/02 4

リッカート尺度 Likert Scale

- 1930年代後半に提案
- 相加評定尺度 summated rating scale
- 問題となる対象についての質問を多数 (20 ~ 30) 作成し、その態度について予備的尺度で回答させる。各質問のスコアの和を態度の尺度とする形をとる。

6/12/02 5

リッカート尺度(2)

- 問題点
 - 再現性が怪しい
 - 評点が発離しない (= 一点に集中する) 質問の扱い 和をとる質問から除外
(理由) 全員が同じ回答をしているのならば、態度を測るには不適當。またスコアの総和の分布も定数分シフトしているだけで、その質問があってもなくても分布の形状に変化はない。

6/12/02 6

リッカート尺度(3)

■ 評点の分離度を測る方法:

G-P分析 Good-Poor Analysis

- 回答者によって当該質問の回答が分離しているかどうかを調べる方法。
- 得点上位25%の群の得点平均 μ_U と得点下位25%の群の得点平均 μ_L を求め、双方の群の母集団平均が同等かどうかを検定する。

6/12/02

7

ガットマン尺度

■ Guttmanによって1940年代半ばに提案された尺度。類積尺度ともいう。

■ 特徴: 一連の態度を表す文章のうち、一つの態度文への賛成は、必ずそれよりも下(または上)の態度を示す文への賛成を前提としていること。

6/12/02

8

ガットマン尺度(2)

■ 例) 喫煙への態度

- 自宅での喫煙を受け入れる 5
- 職場での喫煙を受け入れる 4
- 公衆の閉鎖空間(レストランなど)での喫煙を受け入れる 3
- 公衆の開放空間(公園)での喫煙を受け入れる 2
- 絶対喫煙は認めない 1

■ 一番上の質問に をつけるならそれ以下は全て をつけるはず 成り立たなければ質問を再作成

6/12/02

9
